

授与番号	甲第 1796 号
------	-----------

論文内容の要旨

知的に正常な早産極低出生体重児における学齢期の自尊心に影響する因子と親子関係との関連について

(白倉正博, 亀井 淳, 赤坂真奈美, 中軽米美里, 小山耕太郎)

(岩手医学雑誌 71 巻, 4 号 令和元年 10 月掲載予定)

I. 研究目的

我が国の早産児の出生数は年々増加し、その生存率も飛躍的に向上したため、就学や就労状況などの社会的予後には多大な関心が寄せられ、当施設ではこれまで早産極低出生体重児や超早産児の長期予後を調査してきた。

本研究では、早産極低出生体重児の自尊心に関連する周産期因子を明らかにするとともに、その親子関係において自尊心と関連する項目を調査することで、親への支援としてどのような症例に対し何が必要か、その根拠となる基本情報を検討することを目的とした。

II. 研究対象ならび方法

2002 年 4 月から 2011 年 3 月に当院新生児集中治療室に入院し、就学前の知能検査で知能指数 80 以上の正常知能であり、2017 年 4 月の時点で学齢期（小学 1 年～中学 3 年生）にある児にアンケート調査、自尊心評価、親子関係診断検査の各用紙を郵送し、回答が得られた 108 人を対象とした。周産期情報は新生児集中治療室の入院データベースから新生児因子と母体因子を調査した。日常生活は記名自記式アンケートを親へ郵送して調査した。身体計測値は日本小児内分泌学会の体格指数計算ファイルを使用し、身長 SD スコア、体重 SD スコア、肥満度を算出した。自尊心の評価は子ども用 5 領域自尊心尺度の翻訳版を親へ郵送し、子ども自身に回答してもらい調査した。親子関係の評価は、FDT 親子関係診断調査を郵送し、子供が見た母子関係と父子関係、親から見た親子関係を回答してもらい調査した。対象とアンケート未回収との背景比較は、数値は Mann-Whitney U 検定で、比率はカイ二乗検定を用いた。対象の学年別自尊心得点は Steel-Dwass 検定で比較した。自尊心尺度の関連因子解析は、下位尺度の点数を従属変数に、周産期情報およびアンケート調査項目を独立変数とした stepwise 重回帰分析を行った。自尊心尺度と FDT 親子関係診断検査との相関は Spearman 順位相関係数を求めた。全ての解析で有意水準を 5%（両側）とした。

Ⅲ. 研究結果

1. 自尊心下位尺度は小学1-3年生, 小学4-6年生, 中学1-3年生の3群に区別し, 学年が上がるにつれて有意に低い値となった下位尺度は, 全般尺度 (小学4-6年生 13点 vs 中学1-3年生 11点, $p=0.0120$) および 身体尺度 (小学1-3年生 12点 vs 中学1-3年生 9点, $p=0.0075$) と (小学4-6年生 12点 vs 中学1-3年生 9点, $p=0.0412$) および 家族尺度 (小学4-6年生 16点 vs 中学1-3年生 14点, $p=0.0252$) であった.
2. 各自尊心下位尺度の関連因子解析について
全般尺度は脳室周囲白質軟化症 ($\beta = -0.309$, $p=0.002$) と調査時年齢 ($\beta = -0.231$, $p=0.021$) が, 学業尺度は呼吸窮迫症候群 ($\beta = 0.255$, $p=0.016$) と出生体重 ($\beta = 0.22$, $p=0.037$) が, 身体尺度は脳室周囲白質軟化症 ($\beta = -0.274$, $p=0.007$) と調査時年齢 ($\beta = -0.235$, $p=0.02$) が, 家族尺度と社会尺度は脳室周囲白質軟化症 ($\beta = -0.298$, $p=0.004$), ($\beta = -0.373$, $p=0.002$) が有意な関連因子であった.
3. 親子関係調査の分類について
子から見た母子関係は小学4-6年生, 中学生のいずれも安定型が多く (97.0%, 97.0%), 子から見た父子関係もいずれとも安定型が多く (90.9%, 90.9%), 親から見た親子関係もいずれとも安定型が多かった (83.3%, 78.1%).
4. 自尊心尺度と親子関係尺度との相関について
子から見た母子関係に相関する項目が多く, 特に男子の家族尺度が「被拒絶感」と強い負の相関 ($r=-0.7471$, $p<0.001$) があった. 一方「心理的侵入」, 「厳しいしつけ」 および「達成要求」はほとんど相関しなかった.

Ⅳ. 結 語

知的に正常な早産極低出生体重児は脳室周囲白質軟化症児を除けば, その後の自尊心は必ずしも低下することなく, 児が感じている親子関係も殆どが安定型に属することが明らかになった. 早産極低出生体重児であっても健全な家庭環境の中で適切に育てていくことにより自尊心は低下することはないということを育てていく両親に対し, 肯定的なアドバイスを与える根拠となる. 一方, 運用のための予算やマンパワーを要するが, PVL児など将来の自尊心低下に影響すると考えられる児に対し, 親の養育スキルの獲得と親子関係の改善を目的とした早期介入プログラムの導入が今後の課題となる.

論文審査の結果の要旨

論文審査担当者

- 主査 教授 福島明宗 (臨床遺伝学科)
副査 准教授 米澤久司 (内科学講座：神経内科・老年科分野)
副査 講師 星 克仁 (神経精神科学講座)

近年、我が国の早産児や低出生体重児の出生数や生存率は飛躍的に向上している。しかしそういった児に対する自尊心に関する研究報告は少ない。本研究論文は、早産極低出生体重児の自尊心に関連する周産期因子を明らかにするとともに、その親子関係において自尊心と関連する項目を調査し、親への支援としてどのような症例に対し何が必要か、その根拠となる基本情報を検討することを目的とした。その結果、知的に正常な早産極低出生体重児は脳室周囲白質軟化症児を除けば、その後の自尊心は必ずしも低下することなく、児が感じている親子関係も殆どが安定型に属することが明らかになった。早産極低出生体重児であっても健全な家庭環境の中で適切に育てていくことにより自尊心は低下することはないということを育てていく両親に対し、肯定的なアドバイスを与える根拠となった。一方、コストはかかるが、PVL児など将来の自尊心低下に影響すると考えられる児に対し、親の養育スキルの獲得と親子関係の改善を目的とした早期介入プログラムの導入が今後の課題となることを示した。

本論文は、早産極低出生体重児であっても児の自尊心は低下しないことを明らかにし、今後の自尊心に関わる研究につながる有益な研究と言える。学位に値する論文である。

試験・諮問の結果の要旨

観察研究の手法、統計解析手法、研究の臨床的応用について諮問を行い適切な解答を得た。学位に値する学識を有していると考え。また、学位論文の作成に当たって、剽窃・盗作等の研究不正は無いことを確認した。

参考論文

- 1) てんかん外科手術を受けた海馬硬化による内側側頭葉てんかんの長期予後 (白倉 正博, 他5名と共著). 小児科臨床 67 巻, 8号
- 2) 二次性カルニチン欠乏症に対する速やかなレボカルニチン静注の重要性について (亀井 淳, 他8名と共著). 日本小児救急医学会雑誌 17 巻, 3号